

## 近代の松島における風景地の整備と眺めの関係

The Relationship between Natural Landscape Area Establishment and Characteristics of Scene in Matsushima, in Modern era

伊藤 弘\*

Hiromu ITO

**Abstract:** This study aims to clarify the relationship between the reservation of land to preserve the natural landscape and characteristics of the scenes tourists experienced in Matsushima, in the modern era when the administration took many measures based on travel accounts. Matsushima has been a as popular sightseeing destination since ancient times. As a result, the establishment of natural landscape areas in Matsushima was almost completed in the pre-war period, but only visual scenery was examined. While few tourists experienced these newly designated areas in the pre-war period, after the war, the number of visits to these scenic areas dropped dramatically. Those who came to see the scenery were influenced both by the change in the type of tour, that is, not being able to stay at Matsushima, and by the changes in the landscape from the war. In the post-war period the "Identity of Matsushima" that visitors had discovered became standard in the region and was unified as a common tourist experience. Each visitor experienced the scenery from a different point of view.

**Keywords:** *Natural Landscape Area, tour, scene, Matsushima*

**キーワード:** 風景地, 観光, 眺め, 松島

### 1. はじめに

古来より、日本においては沿岸域に名所（風景地）が多く存在していた。例えば日本三景である松島、安芸の宮島、天橋立などがその代表的な例である。近代になり「日本風景論」や初期登山家などによって山岳景観が観賞されるようになる<sup>1)</sup>と、戦前までに指定された国立公園はほとんど山岳地帯であるなど、もっぱら山岳地帯を中心に風景地の整備がなされてきた。一方、古来よりある沿岸域に存在する自然風景地では、近代化とともに新たな観光施設や道路の整備などが行われてきた。また、国立公園指定運動などもなされてきた。風景地整備とは、単なる空間の整備とは異なり、見る対象への働きかけだけではなく、どこから眺めさせるか、またどういう意味づけを施すかといった施策も行われるものである。その結果できあがった空間において旅行者たちがどのような眺めを体験してきたかを知ること、今後の風景地整備を検討する上で有用といえる。

近代以降の風景地の整備に関しては、例えば国立公園における集団施設に関する研究<sup>2)</sup>などが明らかになっている。また、同じ日本三景でも天橋立を対象に歴史的景観の変遷がどのように変遷し、それを現在の住民たちがどのように評価しているのかを明らかにしたもの<sup>3)</sup>や、古来よりある風景地における風景地計画の変遷<sup>4)</sup>およびその計画思想と評価されてきた風景との関係をみたもの<sup>5)</sup>や古来よりある自然風景地に対する風景観の変遷をみてきたものはある<sup>6)</sup>が、古来よりある風景地がどのように整備され、それを受け手（旅行者）がどのような眺めを体験してきたかについては明らかにされているとはいえない。

本研究では、古来より風光明媚な場所として広く知られてきた宮城県松島を対象に、様々な政策や施策が展開されたと考えられる明治以降の行政を中心とした風景地整備の展開と紀行文等からよみとる松島において体験された眺めの関係を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

#### （１）対象地および風景地整備の把握

対象地は宮城県松島湾である。松島は中世には霊場として雄島を中心に様々な寺社仏閣が建立された<sup>7)</sup>。松島湾は日本の海岸景観の代表でもある多島海景観で有名であり、近世以降は名所として知られてきた。近代以降、国立公園制度ができる前に地域制の自然公園としての性格を有した松島公園計画<sup>8)</sup>を策定したり、多島海景観を有する国立公園の景観の規範となるなどしていた<sup>9)</sup>。既往研究における風景が生成される過程を参考<sup>10) 11)</sup>に、本研究では松島においてどのように風景地の整備がなされてきたのかを、主に行政による視点場の整備・空間および環境の変化・空間への意味づけ<sup>12)</sup>を指標にとって整理した。視点場の整備は新しい視点場の出現および視点場の整備（公園化等）を、空間および環境の変化は多島海景観の対象となっている湾内での変化を、利用者への働きかけ<sup>13)</sup>としてみた空間への意味づけは行政によって指定される法制度および当該法制度の趣旨から把握した。なお、花火大会や現在行われている「かき祭り」などの時期的なイベントは本研究では対象外とし、恒常的な風景地整備のみを対象とした。以上は各種史料および地形図からの読み取りにより行った。

#### （２）対象文献および体験された眺めの把握

利用者がどのような眺めをどこから体験していたのかを、紀行文および随筆型の案内書から読み取った。紀行文などは、風景観を定着させる働きがあるとともに、受け手である旅行者が対象地をどのように評価してきたのかをみるために既往研究でもいくつか研究対象とされてきた<sup>14) 15)</sup>。今回対象とする文献は、既往研究<sup>16)</sup>を参考に、各種電子アーカイブ（青空文庫、国会図書館近代デジタルライブラリ）、「明治紀行文文学集（筑摩書房、1974）」「現代紀行文文学全集（ほるぷ出版、1976）」「トラベルガイド（山田書院、1999）」「ふるさとへの旅（国際情報社、1977）」「美しい日本の旅（学研、1974）」に収監されている紀行文とした<sup>17)</sup>。これらの文献から松島の眺めを描写している記述を抜き出した。原則ひとつ

\*東京大学大学院農学生命科学研究科

表 - 1 対象文献

| 年    | 著者    | 作品           | 記述数 | 年    | 著者       | 作品            | 記述数 |
|------|-------|--------------|-----|------|----------|---------------|-----|
| 1887 | 幸田露伴  | 実賢紀行         | 1   | 1910 | 落合昌太郎    | 東北七日の旅        | 2   |
| 1888 | 松島園誌  | 松島園誌         | 1   | 1912 | 翠陽子      | 新式記事文         | 2   |
| 1889 | 芳賀真咲  | 松島道案内        | 2   | 1915 | 渥塚麗水     | 旅かがみ          | 1   |
| 1893 | 神保孝慶編 | 日本地理旅行談：『松島』 | 1   | 1918 | 田山花袋     | 一日の行楽         | 5   |
| 1893 | 正岡子規  | はて知らずの記      | 6   | 1918 | 田山花袋     | 山水小記          | 4   |
| 1893 | 中原透   | 松島案内 端巖寺略伝   | 1   | 1920 | 全国名所案内者編 | 松島見物          | 3   |
| 1895 | 風賀基三郎 | 仙台紀行附松島遊記    | 6   | 1920 | 田山花袋     | 山水処処          | 3   |
| 1896 | 田澤稲舟  | 五大堂          | 1   | 1920 | 田山花袋     | 水郷めぐり         | 2   |
| 1897 | 徳富猪一郎 | 漫興雑記         | 1   | 1924 | 安倍能成     | 旅信            | 3   |
| 1898 | 西野前知  | 松島紀行         | 2   | 1927 | 島崎藤村     | 山陰土産          | 1   |
| 1898 | 島崎藤村  | 一葉船          | 5   | 1935 | 斎藤清衛     | 松島より石巻へ       | 1   |
| 1899 | 大橋乙羽  | 千山万水         | 3   | 1938 | 吉田絃二郎    | 松島紀行          | 5   |
| 1899 | 大槻文彦  | 松島遊覧の栞       | 3   | 1951 | 坂口安吾     | 伊達正宗の城へ乗り込む   | 5   |
| 1904 | 野沢潤   | 記事紀行文 千景万色   | 4   | 1952 | 瀧井孝作     | 松島秋色          | 2   |
| 1905 | 小泉墨水  | 敷島美観         | 2   | 1953 | 片山廣子     | 燈火節           | 3   |
| 1906 | 河東碧梧桐 | 三千里          | 3   | 1969 | 巖谷大四     | 「奥の細道」今昔      | 2   |
| 1906 | 久保天随  | 山水写生         | 1   | 1974 | 千葉治平     | 東北松島を訪ねて      | 3   |
| 1906 | 拾華散人  | 山紫水明：現代の美文   | 3   | 1976 | 飯田龍太     | 『みなと紀行』『塩釜』   | 1   |
| 1907 | 中村枯林  | 旅ごころ         | 3   | 1977 | 豊田穰      | 松島湾とカキ汁       | 2   |
| 1907 | 長塚節   | 船華日抄         | 2   | 1978 | 戸部新十郎    | みちのくの風土に桃山の香り | 2   |
| 1908 | 渥塚麗水  | 露分衣          | 4   | 1985 | 司馬遼太郎    | 街道をゆく 仙台・石巻   | 2   |
| 1910 | 伊藤銀引  | 日本風景新論       | 5   | 1999 | 大淵唯雄     | みちのくの歴史と伝統    | 1   |

の視点場からの眺めを単位の基本とした。眺めを分析するに当たっては、景観分析モデル<sup>18)</sup>を援用し、視点場・視対象・景観種類を指標とした。視点場は対象文献における記述がどこからのものかを示している。視対象は、具体的に空間の何を記述しているかを示している。景観種類は、それら視対象をどのように記述しているかを示しており、具体的には眺望景観（視点が固定された眺め）・シークエンス景観（視点が移動しながら記述される眺め）・場の景観（一定範囲の眺めの特徴を示す）<sup>19)</sup>・俯瞰景（高所から見下ろした眺め）に分けた。これらは主に視点と視対象の関係から判断される。具体的にはまずシークエンス景観かどうかを判断した後に、視点場および視対象の位置関係から整理した。例えば「船行く事飛ぶが如く一島去れば一島迎へ迎ふるかと思へば去り、去るかと見れば却随て来たる、前に見た島が後ろになれば忽ち其象が替はる左に對はんとすれば右に背く<sup>20)</sup>」のように視対象が移りゆく様子を示す記述はシークエンス景観と判断した。

### 3. 結果

#### (1) 松島における風景地整備 (図 - 1)

松島では、風景地としての整備の特徴から大きく松島公園計画が検討され始めた 1900 年以前と戦前期 (1950 まで)、戦後期に時代区分できる。対象となった文献は、1900 年以前: 13 文献 (記述数 33 件, 作者 10 名)、戦前期: 21 文献 (記述数 59 件, 作者 17 名)、戦後期: 10 文献 (記述数 23 件, 作者 10 名) と戦前期が最も多く、田山花袋と渥塚麗水が複数の文章を記している。

藩政時代以前より、松島では湾を囲むようにして四大観と呼ばれる展望地があり、名所となっており、前述したように中世以前は和歌に詠まれたり霊場として存在していた。近世は「日本三景」と表現され、風光明媚な場所として意味づけられていた。

##### 1) 1900 年以前

1900 年前後には松島は充分管理されているとは言いがたく、また来訪客も減少してきたとされている<sup>21)</sup>。松島湾の整備は海岸沿いに防波堤や埠頭を設置する程度であった。また、四大観以外の新たな展望地も整備されていなかった。

##### 2) 戦前期

松島への旅行者誘致を目的に、本多静六監修のもと松島公園経営計画が策定された<sup>22)</sup>。そこでは、荒れ果てた森林 (具体的には松林) の植栽が視点場との関係から計画・植栽され<sup>23)</sup>、湾内の風景は変化したと考えられる。また、新たな視点場として松島パークホテルの建設が計画され竣工された (1940 年に火災で焼失)。さらに、塩竈と松島を結び海岸線沿いを走る塩松観光道路の開通や海岸線を走る鉄道線 (宮城電気鉄道、現仙石線) の開通、多島海により近接した展望地として新富山や双観山が展望地として見出されるなど、新たな視点場が複数設けられた。1902 年ころより松島湾ではカキの人工的養殖に力を入れ始めた。当初は竹・クリ・ナラなどの枝をたてていた。1920 年ころより半垂下式のたな立法が採用され主流となり、湾内の風景に変化をもたらした<sup>24)</sup>。

| 時期区分     | 視点場  | 対象空間               | 空間への意味づけ   |
|----------|--|--------------------|--|
| 藩政時代以前   | 四大観・遊覧船  |                    | 和歌等・霊場   |
| 1900 年以前 |  | 1890 松島海岸に防波堤・埠頭設置 |  |
| 戦前       | 1902 新富山設置   | 1902 カキ人工的養殖の本格化   | 1902 県立公園に指定<br>1908 国有地が公園用地に編入<br>1909 松島公園経営案策定 |
|          | 1913 パークホテル開業                                      | 1910 松を中心とした植林     |  |
|          | 1919 松島湾汽船創立                                       |                    |  |
|          | 随海電車開通 (現仙石線)                                      |                    | 1923 名勝に指定   |
|          | 1925 遊園地経営   |                    |  |
|          | 1927 湾内回遊船の整備                                      |                    |  |
|          | 1927 松島水族館開館                                       |                    | 1927 日本新八景では対象外<br>1932 国際観光拠点に選定<br>1934 田村剛視察    |
|          | 1935 塩松観光道路  |                    |  |
|          | 1939 ニューパークホテル開業                                   |                    |  |
|          | 1940 ホテル火災   |                    | 1953 特別名勝に指定                                       |
| 戦後       | 1955 松島観光汽船創立                                      |                    |  |
|          | 新松島駅開業 (現東北本線)                                     |                    |  |
|          | 1956 双観山展望地造成                                      |                    |  |
|          | 1959 新富山周辺造成                                       |                    | 1959 全国観光百選  |
|          | 1963 多くの宿泊施設建設<br>周遊大型遊覧船の航路許可<br>1972 松島パノラマライン開通 |                    |  |

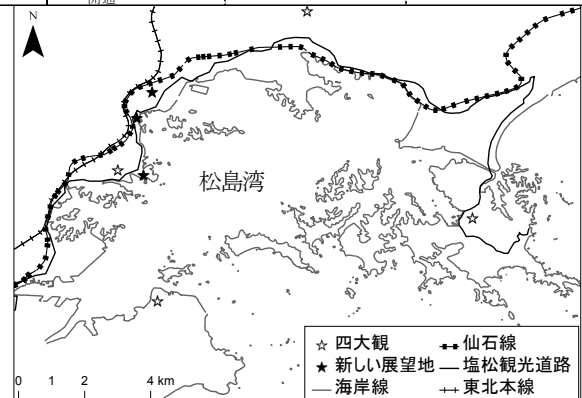


図 - 1 風景地整備の変遷 (上) と視点場の変遷 (下)

この頃松島は、県立公園に指定された後に「四季を通じて自然の風景の観賞など、実に松島は日本の学界が世界に誇る学術上高い価値をしめしている」<sup>25)</sup>として名勝に、また国際観光拠点に指定されるなど、行政による県内にとどまらず風景を資源とした日本を代表する観光地としての意味づけがなされていた。また、この頃は国立公園指定請願運動も行われており、そこでは「峯嶽起伏、崎岬ノ参差、湾浦ノ曲折或ハ奇岩、断崖ノ碧海ニ望ム所眺望雄大頗ル景趣ニ富ム。」と評しており、いずれも湾の眺めを評価していることがうかがえる。

##### 3) 戦後期

輸送力の効率化を目的として山側を走っていた東北本線が海側に移動し、新たに松島駅が設置された。このようにして、公共交通機関を利用する場合は、乗車しながら湾を眺めることができるようになった。しかし、その他の新たな展望地は設けられず、新富山や双観山周辺の整備など戦前に設けられた視点場の改良にとどまった。また、1963 年ころより汀線沿いには宿泊施設が多数建設されるようになり、その収容力は 1980 年ごろには戦前期の軒数がおよそ 4 倍、収容力が 10 倍程度となった。これら宿泊施設によって風景そのものも変化した<sup>26)</sup>。しかし、観光形態としては依然として宿泊を伴う旅行者数は少なかった<sup>27)</sup>。「日本的な自然美を代表するものとして、また長く景観美を保護する必要から」<sup>28)</sup>特別名勝指定や、全国観光百選への入選など、意味づけも戦前のものを踏襲・強化するにとどまっている。また湾の周辺南西沿岸部には仙台火力発電所が設けられ、これも風景に変化をもたらした<sup>29)</sup>。

表 - 2 視対象記述頻度

| 時代           | 記述数の多い視対象 ( ) 内は記述数 |        |        |         |        |
|--------------|---------------------|--------|--------|---------|--------|
| 1900年以前 (33) | 島 (27)              | 海 (15) | 松 (14) | 山 (10)  | 湾 (6)  |
| 戦前期 (59)     | 島 (38)              | 海 (27) | 松 (22) | 時節 (17) | 湾 (10) |
| 戦後期 (23)     | 海 (11)              | 島 (10) | 産業 (7) |         |        |

(記述数が5件以上ある件数上位5位までを記述)

表 - 3 数量化3類結果

|     | 第1軸   | 第2軸   | 第3軸   | 第4軸   | 第5軸   |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 全体  | 4.28  | 0.01  | 0.12  | 0.10  | -0.23 |
| 島   | -0.26 | -0.13 | -0.55 | 0.09  | -0.38 |
| 海   | -0.25 | -0.09 | 0.29  | -0.50 | -0.34 |
| 松   | -0.26 | -0.47 | -0.84 | 0.63  | -1.01 |
| 時節  | -0.02 | -1.03 | -1.22 | -0.56 | 2.85  |
| 湾   | -0.23 | 0.08  | 2.07  | -1.53 | 0.50  |
| 山   | -0.23 | 1.07  | 0.61  | -1.77 | -0.52 |
| 建物  | -0.20 | 3.95  | -0.51 | 1.42  | 1.17  |
| 産業  | -0.32 | -0.85 | 2.25  | 2.42  | 0.65  |
| 寄与率 | 28.4% | 15.5% | 13.9% | 12.0% | 10.8% |

(網掛けは絶対値が1以上)

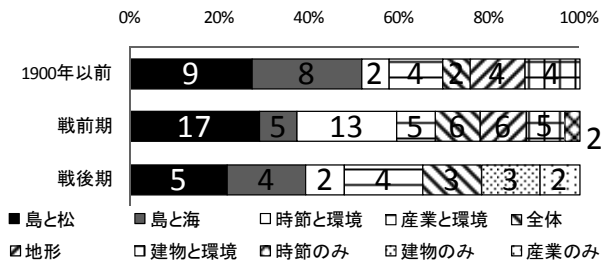


図 - 2 時代ごとの視対象タイプ

## (2) 紀行文による眺めの変遷

近代以降紀行文による松島の眺めは、空間を視覚的に捉えるものばかりであり、その捉え方に差異がみられた。古来より和歌などに歌われてはいるが、歌枕などと関係した記述はなかった。

## 1) 視対象

いつの時代でも海と島が主な視対象であったが、戦前期までは島の記述が最も多かったのに対し、戦後期は海と島がほぼ同数記述されており、若干海の記述の方が多い。また、産業が戦前期までと比べて相対的に多く記述されており、戦前期までに多く記述されていた湾および山々（戦前期にも8件）などの地形的特徴や松の記述が少なくなっている（表 - 2）。

視対象は複数の組み合わせによって構成されているため、数量化3類およびクラスター分析を用いて視対象をタイプ分けした。数量化3類を行った結果（表 - 3）、第5軸までに累積寄与率が80.38%となった。第1軸は全体が正、残りの要素が負にあることから「全体性（全体を対象としているかどうか）」、第2軸は建物・山が正、時節（朝日や夕日、雪など）・産業が負になっていることから「内陸性（内陸のものを対象としているかどうか）」、第3軸は産業・湾が正、時節・松が負になっていることから、地表から高さを伴って存在する「地物性（地物を対象としているかどうか）」、第4軸は産業・建物が正、山・湾が負にあることから「地形性（地形を対象としているかどうか）」、第5軸は時節・建物が正、松が負にあることから「特定性（地域や時節を特定するものを対象にしているかどうか）」と解釈された。これら5軸の因子得点を用いてウォード法によるクラスター分析によりタイプ分けした結果、島と松を記述している「島と松」、島と海を記述している「島と海（17件）」時節と湾内の様々な自然環境を記述している「時節と環境（17件）」養殖などの産業と湾内の自然環境を記述している「産業と環境（13件）」特定の要素は記述せずに全体を捉えている「全体（11件）」湾周辺の山々などを記述している「地形（10件）」建築物と自然環境を記述している「建物と環境（9件）」月や夕暮れなどのみ記述している「時節のみ（2件）」建築物だけを記述している「建物のみ（3件）」産業だけを記述している「産業

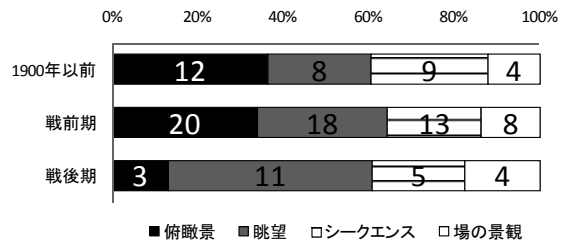


図 - 3 時代ごとの景観種類

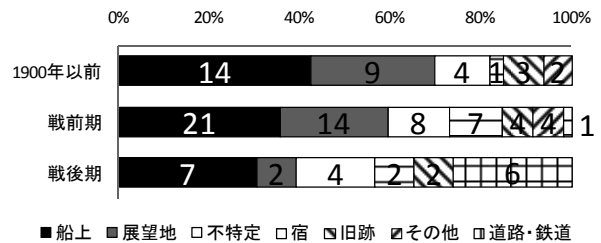


図 - 4 時代ごとの視点場

のみ（2件）の10タイプに分けることができた。これらのタイプと時代区分の関係をみると（図 - 2）、必ずしも時代ごとに有意な差異があるとはいえないが、戦前までは「島と松」の記述が多い。1900年以前では「島と海」が次いで多いのに対し、戦前期では「時節と環境」が次いで多い。戦後期になると、「島と松」は最も多いものの、他のタイプと比べてほとんど記述数に差はなく、戦前までに比べて多様に分かれている。また、戦前までになかったタイプとして自然環境を描写せずに建築物や産業のみを描写する「建物のみ」「産業のみ」が新たに出現している。逆に「地形」「建物と環境」「時節のみ」はみられなくなっている。

## 2) 景観種類（図 - 3）

戦前期までは俯瞰景が最も多い。1900年以前は俯瞰景に次いでシーケンス景観が多かったのに対し、戦前期は眺望景観が2番目に多い。一方、戦後期には俯瞰景は減少し最も少ない。逆に眺望景観が最も多く、およそ半数の記述が眺望景観であり、その他の種類はほぼ同数であった。

## 3) 視点場（図 - 4）

各時代を通して最も多いのは船上からの記述であった。戦前期までは船上に次いで展望地が多かったのに対し、戦後期は展望地からの記述は極端に少なくなり、道路や鉄道（主に道路）からの記述が増加した。また、雄島（かつて松島が霊場として知られていた頃を中心とされている島）や福浦島などの島や地藏堂、場所を特定できない山上など「その他」からの記述がなくなっている。戦前期では、3ヶ所以上の視点場からの記述が21文献中12文献（1900年以前：13文献中5文献、戦後期：10文献中3文献）とその割合が多く、域内を周遊する観光形態の傾向が強いことがうかがえる。逆に戦後期は、域内を周遊しない観光形態の傾向が強いことが示唆される。

戦前期においては古来より知られていた四大観からの眺めが多く、既に設置されていたにも関わらず新たに整備された展望地からの記述は5件（15件中）にとどまっている。また、いずれの時代にも視点場が特定できない記述が多い。戦前期だけは宿からの記述も多いが、この時代に新しく建設されたパークホテルからの記述は1件のみであった。

## 4) 体験された眺めの変遷

以上、個別にみてきた眺めを、どこから何をどのように眺めていたのか総合的にみたらうで、体験頻度の高い眺めを抽出する（表 - 4）。まず眺めを表す視対象と景観種類の組み合わせを中心に整理すると、1900年以前は島と松のシーケンス景観と島と海の俯

表 - 4 時代ごとの体験頻度の高い眺めの変遷

|          | 視対象   | 景観種類   | 視点場   | 記述数 |
|----------|-------|--------|-------|-----|
| 1900 年以前 | 島と松   | シークエンス | 船上    | 6   |
|          | 島と海   | 俯瞰景    | 展望地   | 5   |
|          |       |        |       |     |
| 戦前期      | 島と松   | シークエンス | 船上    | 6   |
|          |       | 眺望     | 船上    | 3   |
|          |       | 俯瞰     | 宿     | 3   |
|          | 時節と環境 | 眺望     | 船上    | 3   |
|          |       | シークエンス | 船上    | 3   |
|          |       |        | 展望地   | 2   |
|          | 全体    | 俯瞰景    | 宿     | 1   |
|          |       | 俯瞰景    | 展望地   | 4   |
|          |       | 俯瞰景    | 展望地   | 3   |
|          | 建物と環境 | 眺望     | 船上    | 2   |
|          |       |        | その他   | 1   |
|          | 産業と環境 | シークエンス | 船上    | 1   |
|          |       |        | 電車・道路 | 1   |
|          |       |        | その他   | 1   |
| 戦後期      | 島と松   | 眺望     | 宿     | 1   |
|          |       |        | 旧跡    | 1   |
|          |       |        | 電車・道路 | 1   |

視対象と景観種類を組み合わせた記述数3件以上のものを抽出

瞰景が多く、視点場はそれぞれ船上と展望地のみである。戦前期になると、島と松のシークエンス景観・俯瞰景・眺望、時節と環境の眺望・俯瞰景・シークエンス景観、全体の俯瞰景、地形の俯瞰景、建物と環境の眺望、産業と環境のシークエンス景観が多い。環境に時節と建物、産業を組み合わせた視対象は同じ景観種類でも複数の異なる視点場から記述されている。逆に島と松は景観種類と視点場が一对一対応している。戦後期は島と松の眺望だけが大きく、複数の異なる視点場から記述されているが、その数は少なく視点場ごと来訪者ごとに体験された眺めは異なっていたといえる。上記変化は逆にいえば同じ視点場であっても1900年以前と戦前期の視対象および景観種類の組み合わせは異なっていることを示す。例えば船上からは1900年以前はほぼ島と松のシークエンス景観の記述であったのに対し、戦前期は島と松のシークエンス景観に加えて時節と環境のシークエンス景観および眺望景観と島と松の眺望景観が多く記述されているなど多様化している。

前述の通り松島においては、宿泊を伴わない観光形態の傾向が顕著であることを<sup>30)</sup><sup>31)</sup>考えると、こうした観光形態も各文献の著者たちが体験した眺めに影響を及ぼしていることが考えられる。

#### 4. まとめ

##### (1) 風景地整備と体験される眺め

1900年以前は、展望地や船上から島を中心とした眺めを体験することが多く、その眺め方はやや固定されていた。実際の空間も藩政時代より変化はほとんどなく湾ではカキの養殖が始まったが、それは眺めの対象にはなっていなかった。戦前期になると、いくつか特徴的な眺め方が行われるようになった。新たに整備された視点場からの記述が少なく視対象にも変化がないこと、複数の従来ある視点場から記述した文献が増えたことを考えると、これは湾内の島々への植林や養殖産業の発達という風景の変化に加えて新たな視点場の創出という風景地の変化というよりも、域内を周遊する傾向が出てきたという観光形態の変化によるものであった。また、全体の記述や時節の記述など場の景観や特定の要素だけではなく松島湾全体も記述しており、著者たちの風景観（どのような眺めに価値を見出すか）も変化したといえる。こうして、観光形態の変化と著者たちの風景観にも変化が生じ、体験された眺めがいくつかの種類に収斂され、松島を代表する眺め（松島らしさ）が多様化したといえる。戦後期には、宿および展望地からの記述が減少し道路・鉄道からの記述が増加していることから、今回とりあげた文献の著者たちは車を利用して別の場所に移動する宿泊を伴わず域内を周遊しない観光形態をとっており、それが体験される眺めに影響を及ぼしたと考えられ、複数の来訪者によって共

有され、地域の規範となる多様な「松島らしさ」は再び一元化され、体験した眺めは視点場ごと来訪者ごとに異なるものとなった。一方、産業や建物が相対的に多く記述されるようになっており、戦前期と比べて風景観にも変化が現れたことがうかがえる。また、地形や時節など自然条件に関する記述はなくなり産業や建物だけの記述がみられるようになった。戦後期はこうした風景観の変化に風景地の整備が充分対応してきたとはいいたい。

##### (2) 今後の風景地整備に向けて

本研究でみてきたとおり、観光形態が風景観と合致すると、いくつかの新たな規範となる眺めが生まれた。すなわち、新たな風景地の整備というよりも既存の空間での新たな風景観と観光形態の組み合わせによって新たな眺めを享受することが可能になると考えられる。一方、風景観の変化と車での移動を主とした観光形態の変化によって松島の一部を切り取って観賞するかのような眺めが享受されるようになっている。こうした現象が道路や鉄道の整備など対象地へのアクセス向上によるものなのか、そもそもそういう風景観に基づくものかは不明である（双方の影響によるものとも考えられる）。風景地を整備するその主たる目的が風景の鑑賞であることを考えると、風景地へのアクセス向上を図る整備が、その目的に合致するかどうか慎重に検討していく必要がある。また、松島においては前述した通り戦後期に規範となるような眺めが減少していることから、風景地においてどのような新たな眺めを提供し、そこにどのような意味づけを施すかといった目標像も観光形態と併せて検討していく必要がある。

#### 補注及び引用文献

- 1) 田中正大 (1981) : 日本の自然公園 自然保護と風景保護, 相模書房, 209
- 2) 堀繁 (1994) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (2) : 利用計画と管理, 東京大学農学部演習林研究報告, 137-209
- 3) 深町加津絵・奥敬一 (2004) : 天橋立における歴史的景観の変遷と地域住民の景観評価に関する研究, ランドスケープ研究 67(5)
- 4) 手嶋潤一 (2006) : 日光の風景地計画とその変遷, 随想舎, 398pp.
- 5) 山口敬太・水谷肇・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦 (2006) : 昭和初期の嵯峨における風景の価値評価に関する研究, 景観・デザイン研究論文集 1, 185-192
- 6) 西田正憲 (1999) : 瀬戸内海の発見, 中公新書, 263pp
- 7) 川村 晃生著・浅見 和彦著 (2006) : 壊れゆく景観, 慶應義塾大学出版会, 29-37
- 8) 前掲書1), 76
- 9) 伊藤弘 (2010) : 大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の評価, 日本建築学会論文集 656, 2391-2396
- 10) 篠原修 (1998) : 景観用語辞典, 彰国社, 31
- 11) エドワード・レルフ (1999) : 場所の現象学, 筑摩書房, 341pp
- 12) 主体が空間の有する意味や機能に価値を見出すことが価値づけである。本研究では行政による法制度の指定によって利用者にとっては「行政によって『価値がある』と認められた空間」という意味が付け与えられと考え、「空間の意味づけ」とした
- 13) 篠原修 (1998) : 景観用語辞典, 彰国社, 80-81
- 14) 山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦 (2010) : 近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究, 土木学会論文集 D.66(1).14-26
- 15) 西田正憲 (2004) : 近世の紀行文等にみる山岳表象の特質, ランドスケープ研究 68 (5), 407-410
- 16) 小野良平 (2009) : 用語「鎮守の森」の近代的性格に関する考察, ランドスケープ研究 73(5), 671-674
- 17) 他にも各種紀行文を確認したが、本研究のデータとして適しているものは示した文献であった
- 18) 前掲書10)
- 19) 場の景観は、「(文頭で) 云ふべからず述ぶべからざるの妙島あり奇松あり (野沢潤 (1904) : 記事紀行文 千景万変)」のように視点場が特定されない記述となる。
- 20) 芳賀真咲 (1889) : 松島道案内
- 21) (財) 宮城歴史刊行会 (1955) : 宮城歴史 16.観光, 2
- 22) 宮城県内務部 (1915) : 松島公園経営案
- 23) 宮城県内務部 (1915) : 松島公園経営報告書, 96-100
- 24) 松島町誌編集委員会編 (1960) : 松島町誌, 232-233
- 25) 前掲書24), 218
- 26) 松島町史編集委員会編(1991) : 松島町史 通史編Ⅱ, 280-290
- 27) (社) 日本観光協会 (1984) : 全国観光動向
- 28) 宮城県教育委員会編 (1975) : 特別名勝「松島」保存管理計画策定書, 宮城県文化財調査報告書, 第45集, 1
- 29) 浅見和彦・川村晃彦 (2006) : 壊れゆく景観, 慶應義塾大学出版会, 36
- 30) 前掲書24), 224-225
- 31) 前掲書27)